

氏名（本籍）	兪 善英（韓国）		
学位の種類	博士（心理学）		
学位記番号	博甲第 6975 号		
学位授与年月	平成 26 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	親しい他者に対するストレス開示抑制態度が 精神的健康に及ぼす影響		
主査	筑波大学教授	文学博士	松井 豊
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	湯川 進太郎
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	外山 美樹
副査	筑波大学准教授	博士（人間科学）	青木 佐奈枝

論文の内容の要旨

（目的）従来の研究では、自己開示の抑制による精神的・身体的健康状態へのネガティブな影響が主に実証されており、その理由として従来の尺度の問題点が挙げられた。また、自己開示の抑制と健康との関連において、行動レベルの自己開示や感情表出の抑制に関する検討が多かった。これらの問題点を踏まえ、本論文では、ストレスの程度や社会文化的背景の異なる多様な集団におけるストレス開示抑制態度を網羅的に検討し、ネガティブな出来事の開示抑制といった現象の背景を理解できる理論的モデルを呈示するため、以下の 3 点について実証的検討を行った。第一に、親しい他者へのストレス開示を抑制する理由に焦点を当てたストレス開示抑制態度を測定する新しい尺度を作成した。第二に、社会文化的背景が異なる様々な集団におけるストレス開示抑制態度の検討から、同態度の社会文化的背景を検討した。第三に、ストレスの程度や社会文化的背景の異なる各集団における親しい他者へのストレス開示抑制態度がストレス開示や精神的健康へ及ぼす影響を検討した。

（対象と方法）日英の大学生、東日本大震災を経験していない日本の一般成人、東日本大震災を経験している日本の一般成人、東日本大震災を経験していない日本の消防職員、東日本大震災に派遣された日本の消防職員、韓国の消防職員を対象に質問紙調査やウェブ調査を用いた実証的検討を行った。

（結果）研究 1、研究 2 では、親しい他者に対するストレス開示抑制態度を測定する 30 項目版の尺度（以下、IDS-30）を作成し、日本の大学生を対象に質問紙調査、イギリスの大学生を対象にウェブ調査を行った（ $N_{JP}=611$, $N_{UK}=204$ ）。また、研究 4、研究 5 では、同尺度を用いて日本の一般成人（ $N=746$ ）へのウェブ調査と日本の消防職員（ $N=554$ ）への質問紙調査を行った。その結果、親し

い他者へのストレス開示抑制態度は、理論から想定された‘弱みの隠蔽’、‘あきらめ’、‘相手への配慮’、‘自己解消’、‘気晴らし希求’の5側面がいずれの集団においても共通しており、親しい他者に対するストレス開示抑制態度尺度の交差妥当性が確認された。

また、親しい他者に対するストレス開示抑制態度と精神的健康との関連について、日英の大学生 ($N_{JP}=611$, $N_{UK}=204$)、東日本大震災を経験していない日本の一般成人 ($N=940$)、東日本大震災を経験している日本の一般成人 ($N=746$)、東日本大震災を経験していない日本の消防職員 ($N=554$)、東日本大震災に派遣された日本の消防職員 ($N=535$)、韓国の消防職員 ($N=256$) を対象に、IDS-30 と短縮版の IDS-5 を用いて検討した。その結果、親しい他者に対するストレス開示抑制態度が行動レベルのストレス開示より精神的健康へより大きく影響していた。また、男性では、いずれの集団においても、親しい他者に対する‘あきらめ’が精神的不健康を促進し、‘自己解消’が精神的不健康を抑制した。また、女性では、いずれの集団においても‘相手への配慮’が精神的不健康を促進した。さらに、親しい他者に対するストレス開示抑制態度の中で、自己帰属の2側面(‘弱みの隠蔽’、‘自己解消’)が精神的健康へ及ぼす影響はストレスの程度によって異なっていた。

(考察) 実証的検討の結果に基づき、親しい他者に対するストレス開示抑制態度と精神的健康との関連について整理した。その結果、親しい他者に対するストレス抑制態度は、ストレスの程度や社会文化的背景の異なる様々な集団において共通する現象であり、自己開示の抑制と精神的健康との関連を検討する際には、行動レベルの自己開示の抑制のみならず、自己開示を抑制する理由も考慮する必要が示された。また、親しい他者に対するストレス開示抑制態度が精神的不健康へ及ぼす直接的影響の様相は男女で異なっており、親しい他者との関係における性役割観の影響が示唆された。最後に、ストレスの程度によっては、親しい他者に対するストレス開示抑制態度が適応的に働くことが明らかになった。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文では、従来の知見から不適応的と捉えられてきた自己開示の抑制を、抑制の背景に存在するストレス開示抑制態度と行動レベルの抑制の視点から検討し、行動レベルの抑制よりもストレス開示抑制態度が精神的健康へ及ぼす影響が大きいことを実証した。また、ストレス開示抑制態度には適応的な側面も存在することを実証し、ストレスの程度や社会的役割によってその精神的健康への影響が異なるといった新しい知見が見出された。以上より、ストレス開示の抑制の背景にあるストレス開示抑制態度がストレス開示や精神的健康へ及ぼす影響を理解できる理論的枠組みを呈示できたと考えられる。本論文は日本、韓国、イギリスの、消防職員や一般成人などのデータを精力的に収集し、国際的な比較を行っており、著者の卓越した研究能力を示す論文と評価された。

平成 26 年 1 月 15 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(心理学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。